

演題名：チームで治験を進めることの重要性を感じた事例

氏名：○山垣直美<sup>1)3)</sup>、渡邊真由美<sup>1)3)</sup>、菰田のぞみ<sup>1)3)</sup>、関根典子<sup>1)</sup>、  
鈴木ゆかり<sup>1)</sup>、榎本有希子<sup>1)2)</sup>、安藤智美<sup>3)</sup>、橋本賢一<sup>1)4)</sup>、

所属：<sup>1)</sup> 日本大学医学部附属板橋病院・臨床研究推進センター、<sup>2)</sup> 同・薬剤部、  
<sup>3)</sup> 同・看護部、<sup>4)</sup> 同・総合内科

【背景】日本人女性において最も罹患率の高い乳癌は、検査から診断までの過程が短く癌であることの心的動揺を抱えたまま治療を行うことが少なくない。さらに化学療法における副作用は個々の肉体的苦痛ばかりでなく心的苦痛を与え不安を増強させる。そのため、患者を取り巻く多くの関係者で患者個々の乳癌に対する受け止め方や不安の程度および疑問を十分に把握し、正しい情報の提供を行い支援することが重要となる。今回、抗がん剤の副作用である顔面皮疹の発症を期に CRC が失いかけた被験者からの信頼関係を他部門の協力を得ることで改善することができたので報告する。

【事例】42歳女性。2013.12.10 乳癌と診断される。2013.1.18～2013.5.16 まで術前化学療法を行う。2013.4.12 顔面に皮疹出現。2013.4.24 皮疹が悪化。翌日皮膚科受診にて軟膏を処方され、治療開始。それと同時に皮疹の原因と考えられる薬剤を一時中止。症状が改善した後、2013.5.9.より中止薬を再開する。

【問題点】CRC 単独では被験者のニーズに十分な対応ができなかった。

- ①CRC が中心になり患者に関わることで化学療法室の薬剤師、看護師との関わりが希薄になっていたため、副作用についての情報提供不足が生じた。
- ②不安や疑問について十分に把握できず対応が遅れた。

【対策】外来及び化学療法室のスタッフとの連携強化を図る。

- ①改めて薬剤師、看護師にも介入を要請した。
  - i) 薬剤師が通常診療で化学療法を受けている患者と同様、医師へ副作用に対する治療薬の提案を行った。
  - ii) 看護師からも副作用情報の提供を行った。
  - iii) 患者からの質問には、CRC と治験担当医師だけではなく患者対応するスタッフとも情報を共有し連携を密にして対応した。

【結果・考察】患者は情報量が増えることで、副作用に対して冷静に受け止めることができ、不安の軽減を図ることができた。現在、皮膚症状は改善し、治療や薬剤に対する情報も、担当医と CRC からだけではなく、複数から得ることができるようになり、安心して治療に取り組むことができている。治験に参加しているということで、患者は外来スタッフとの関わりが希薄になったが、繰り返し治験被験者への対応の協力を要請することや、綿密な連絡調整を行うことで、チームで取り組むことができた。今後も他部門のスタッフと治験について理解、協力を得るための努力をし、患者に関わる多くの関係者と連携を図りながら対応していく必要があると考える。